

校長室だより「伸びゆく梢」Ⅲ

文責 柴田町立船迫中学校 校長 三浦 道子

新年の全校集会より

皆さん、新しい年の始まりです。私は、今日ここに集えることの喜びをかみしめています。石川県能登地方を震源とした能登地震の被害は甚大です。もし、自分がその場にいたらと想像してみてください。正月に祖父母の家に遊び行って瓦礫の下敷きとなり命を落とした若い方もいます。まだ、行方が知れない方もいます。震災にも事故にも遭わず、ここにいられること。ウクライナやイスラエルのように空爆やテロの心配もせず、安心して学校に通えること。実はそれだけで幸せで有り難いことなのだ、新聞やニュースを見る度に思います。

さて、私ごとですが、年の瀬に26歳の教え子たちと仙台で会う機会を得ました。当時の担任の先生と学年主任だった私と東京や埼玉の勤め先から帰省した5人の小さな集まりです。彼ら彼女らは、個性が強くてクラスではよく喧嘩やもめ事もありましたが、みんな素敵な職業人になっていました。その中の一人、Mさんの話をします。

Mさんは、高校受験の2月に母親の癌が見つかりました。もうその段階で完治が難しい状況でした。母親の実家がある東京での治療が必要となるため卒業式後には引っ越すことが決まり、あと1ヶ月後に入試が迫る中、宮城県の高校受験を辞退することになりました。その頃はもう東京での出願も叶わない状況でした。Mさんは母子家庭で頼りになる大人も居らず、なによりも母親が日に日に痩せてご飯も食べられなくなっていく日常はどれほど不安だったことでしょうか。クラスメイトが受験や卒業式に向けて準備を進める中、辛い日々を送っていました。一緒に東京の受験可能な高校を探しましたが、Mさんが通える範囲で受験できる高校は、定時制高校の二次募集だけでした。Mさんは進学校を目指していたのに、急な進路変更と家族の病気。泣くのを必死でこらえるMさんを慰めるしかできませんでした。

その春、Mさんは、定時制高校に入学しました。でも、そこは自分が入りたい高校ではないと半年後に都立の高校の編入試験に合格しました。その頑張りや努力は素晴らしいものです。その後、Mさんは母親の死にも直面し、それを乗り越え、東京で看護師をしています。母親の死に寄り添うことで、人の役に立てる仕事に就きたいと強く思ったそうです。そして、今年、オーストラリアに看護師として1年間留学することが決まりました。自分の英語力を磨いて、海外からきた患者さんにも寄り添える看護師になりたいと、目をキラキラさせて語ってくれました。そしてMさんが別れ際、言ってくれた言葉は私にとって宝となる、とても嬉しいものでした。「自分がくじけそうになった時、もう、どうでもいいとふてくされた気持ちになった時、厳しくても温かい先生方の言葉や顔が浮かび励みになりました。先生、ありがとうございました。」と。素敵な大人になって力強く頑張っている教え子たちから、たくさんエネルギーをもらえた出来事でした。

さて、皆さんの5年後10年後はどんな大人になっているでしょう。まずは授業や掃除、委員会活動、部活動の中で**他人を気遣う心をもってください**。中学校は、かけがえのない友を得る大切な時期です。一生の友となる存在を見つけてほしいし、誰かにとってよき友になってほしいと願っています。



